

令和2年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

道府県・政令市名【 福岡県 】

学校名【 朝倉市立比良松中学校 】

| | |
|--------------------|--|
| 1 実践テーマ | Ⅲ |
| 2 実施対象者 (学年・人数) | 朝倉市立比良松中学校 全校生徒 163 名 |
| 3 展開の形式 | (1) 学校における活動 ① 教科名 (保健体育科、道徳科) ② 行事名 (パラスポーツ大会) ③ その他 () (2) 地域における活動 ① イベント名 () ② その他 () |
| 4 目標 (ねらい) | ○パラスポーツを通して、学年や性別、障がいの有無等の様々な違いをこえた人間関係を築くことができる。 ○パラリンピアン講演を通して、目標に向けくじけず壁を乗り越える姿の素晴らしさを感じとることができる。 |
| 5 取組内容 | (1) パラスポーツに挑戦しよう。事前の取組 【保健体育】 保健体育科の授業として、11月18日(水)から全学年でゴールボールとボッチャの授業を行った。ロンドンパラリンピックの金メダリスト浦田理恵選手が行った競技を実際に体験することで、講話の内容を身近に感じさせることをねらいとした取組である。また、パラスポーツを体験することで、すべての人々が楽しむことができるスポーツの可能性について、考えることができるようにするために行った。  生徒は、それぞれの競技の特性やルールについて学習をし、主審や副審、ラインズマンや得点係の役割分担を行い、ゲームを盛り上げることができた。 (2) パラスポーツ大会を実施しよう。当日の取組一午前中一 【学校行事】  体育的行事として、12月9日(木)の午前中にパラスポーツ大会を実施した。パラスポーツ大会のねらいは、前記の通りである。さらに、学年をこえて話し合い、協力し合いながらスポーツを楽しむことができるようにするため、体育委員会を中心として企画・立案を行なった。また、 |

体育祭の縦割り班を利用し、リーダーが3つの班を動かしながら、団結・協力してスポーツ大会を盛り上げていった。この大会には、アテネ・北京オリンピックのスリング日本代表で地元出身の池松和彦選手を講師として招聘した。池松選手には開会式で、スポーツのすばらしさについて話していただき生徒の意欲を高めることができた。



ゴールボールでは、体育の授業が苦手な吹奏楽部の生徒が自慢の聴覚を生かして体ごとボールにぶつかっていく姿が見られた。



ポッチャでは、異学年の6人一組のチームで望み、3年生を中心に知恵を出し合い勝利しようとする姿が見られた。

(3) 浦田理恵選手特別講演会 当日の取組—午後—【道徳科】

12月9日(木)午後より道徳科の時間として、ロンドンパラリンピック・ゴールボール金メダリストの浦田理恵選手の講演会を実施した。視覚障がいを持ちながらも、金メダリストとして活躍する浦田選手の講演を通して、希望と勇気を持ち、困難や失敗を乗り越えて着実にやり遂げる心を育成することをねらいとして行った。浦田選手は、実際のゴールボールを使ったり、生徒をステージ上に上げて体験させたりしながら、生徒の興味・関心を高めていかれた。さらに、自己の弱さを生徒に伝えるとともに、一歩踏み出すことの大切さに気づいたことや強く生きていくことの大切さについても伝えられ、生徒は共感的に話に聞き入ることができた。



6 主な成果

○生徒の感想から

(1) パラスポーツ大会の取組【保健体育】

「ゴールボールやポッチャを体験して、パラスポーツは障がい者だけのためのスポーツという考えが変わりました。障がい者だけではなく、すべての人々が参加できる工夫が色々されていることが分かりました。」
→パラスポーツが障がい者のみのスポーツでは無く、すべての人々がスポーツの楽しさを実感するための工夫がされていることに多くの生徒が気づいた。

(2) パラスポーツ大会の取組【学校行事】

「私は、スポーツは苦手でしたがゴールボールの大会でボールを止めたりゴールをしたりすることができました。他のチームのゲームを見たり、静かに応援したりすることも新鮮でした。来年のパラリンピックでは、ゴールボールを静かに応援したいと思います。」
→体育が苦手な生徒でもパラスポーツの楽しさを実感し、来年のパラリンピックへの興味・関心を高めることができた。

(3) 浦田理恵選手特別講演会【道徳科】

「私は、浦田さんの講演を聴いて、できないことを理由にしてはいけなかったと思いました。できるようになると一歩踏み出す勇気が大事だと思いました。自分でやろうと思うこと、決めたことはやり通すことを、今日から実践したいと思います。」
→理想を実現するために、できないことを理由にせずに努力を続けることの大切さについて考えることができた。

○教師アンケートの結果から(4段階尺度方式)

(2) パラスポーツ大会の取組【学校行事】

①生徒が主体的に取り組み、スポーツの楽しさを実感することができたか。(3.7)

| | |
|----------------------------|--|
| | <p>②パラスポーツに興味・関心を高め、学年・性別・障がいの有無に関わらず、すべての人が参加できることを実感することができたか。(3.9)</p> <p>③学年を超えて、共感的な人間関係や人間関係形成能力を高めるのに有効であったか。(3.8)</p> <p>(3)浦田理恵選手特別講演会【道徳科】</p> <p>①東京オリパラ 2020 に興味・関心を高める講演で会ったか。(4.0)</p> <p>②生徒が講師の生き方に共感し、自分の生き方について考える内容であったか。(3.9)</p> |
| <p>7実践において工夫した点(事業の特色)</p> | <p>(1) パラスポーツに挑戦しよう。 事前の取組 【保健体育】 保健体育科の授業で、事前にルールやゲームの工夫点について考えさせることで、すべての人が行える競技であることに気づかせていった。</p> <p>(2) パラスポーツ大会を実施しよう。当日の取組—午前中—【学校行事】 パラスポーツが共生社会の構築に沿ったものであることに気づかせるため、全校生徒を縦割り班で分割し、学年・性別関係なくチーム編成を行う工夫をした。 多くの人々の協力によって大会が成功することに気づかせるため、選手のみならず、大会運営や審判、ラインズマン、得点係などすべて生徒が役割分担を行い運営するための工夫をした。</p> <p>(3) 浦田理恵選手特別講演会—午後—【道徳科】 オリ・パラ・ムーブメント事業の趣旨を十分に理解している人に講演を依頼するため、(株)アソウ・ヒューマニーセンター・チームアスリートと連絡・調整を行い、講師選定をした。 講師代理人とのメールのやりとりを行いながら、講演内容依頼や確認(道徳的価値、感染症対策について何度も確認を行った)。</p> |
| <p>8主な課題等</p> | <p>(1)全校生徒が一斉に行うパラスポーツ大会では、ゴールボールやボッチャの道具が大量に必要な。それぞれの道具は代金が高いため買いそろえるのに困難である。事前に、近隣の小中高校や公共施設に問い合わせ、道具をそろえる必要がある。</p> <p>(2)大会運営にあたっては、大会会場の広さや1競技がどれくらいの時間を必要とするかなど、事前に確認しておく必要がある。また、パラスポーツの意義を生徒に理解させ、円滑に大会を進めるためにも、すべての教師が事前に競技を体験しておくことが大切である。</p> |
| <p>9来年度以降の実施予定</p> | <p>○ 本校は、オリンピック・パラリンピック・ムーブメント事業を始めて、6年が終了した。これまでの5年間は、午前中に駅伝・持久走大会を行ってきたが、本年度は豪雨災害による河川・道路工事により、比良松中パラスポーツ大会を行った。同じオリンピック・パラリンピック・ムーブメント事業でも、ねらいを変えて取り組ませることで、生徒が共生社会について考えさせるきっかけづくりになったと思う。</p> <p>また、本物のオリンピック・パラリンピアン講演を聴くことで、自己の生き方についてより共感的に考えさせることができた。</p> <p>H27年 レスリング 池松和彦 H28年 陸上競技 山本篤 H29年 レスリング 伊調馨 H30年 マラソン 小嶋由水 R1年 陸上競技 中西摩耶 R2年 ゴールボール 浦田理恵</p> <p>次年度以降も、生徒の実態や地域の実態に合わせねらいを少しずつ変え大会の実施を行ったり、講師の選定をしたりし、取組を継続させていく。</p> |